

日蓮聖人における富木尼教化の一考察

奥野本勇

一 はじめに——問題の所在

日蓮聖人（一二三二—八二）は、教主釈尊が説かれた一代聖教の中で法華経を最上の教えであると確信され、その教えのもとに教化活動を展開されている。

ところで、仏教においては生存する限り避けられない四苦八苦の苦しみがあるという。その四苦とは、「生・老・病・死」である。そこで、この「病苦」に視点を置くと、いかに聖人は信徒に対して「病苦」への教導をなされたのか、ということが問題となる。

ところで、下総に住する富木常忍の妻である富木尼は、文永十一（一二七四）年十月頃、病をわずらっている。その報せを受けられた聖人は富木尼に対し、『可延定業御書』や『富木尼御前御書』をしたためられ、様々な面から教導がなされている。すなわち、信仰面としては法華信仰や志や信行の勧奨、医術面としては四条金吾による治療、聖人の灸治の勧奨、祈

請の面では、日天子・月天子への祈り、さらに子息日頂を介しての祈りや教導の面などである。

これらの側面の中、信仰の面に着目してみると、聖人は富木尼の病に対し、「其上最第一の秘事はんべり。此経文は後五百歳二千五百余年の時、女人の病あらんととかれて候文なり。（中略）当時の女人の法華経を行じて定業を転スルことは秋の稲米・冬、菊花、誰かをどろくべき。（中略）今女人の御身として病を身にうけさせ給フ。心みに法華経の信心を立てて御らむあるべし。」⁽¹⁾とて、現代は釈尊が法華経薬王品に⁽²⁾「予言された、女性が病にかかる時に当たっているため、法華経の修行により定業を転じて寿命を延ばすことは不思議ではないから、法華経の信心を起すよう示されるのである。

ところで、この聖人の説示において、法華経の文証の具体的な根拠は何か、ということが問題となる。

そこで本稿では、「後五百歳中 若有女人」（『大正』第九巻五四頁b）の文について、聖人の他の遺文における引用箇所を

日蓮聖人における富木尼教化の一考察（奥野）

抽出し、その文意を確認したい。

論を進めるうえで、まず聖人が富木尼に対し引用される経論釈について、その出典を確認したいと思う。

二 富木尼の病に対する経論釈引用について

聖人が富木尼の病に対し経論釈の引用がみられる遺文は『可延定業御書』と、『富木尼御前御書』との二書である。その中、引用される経論釈の出典を確認すると以下のことが明らかとなる。

經典は『法華経』『涅槃経』の二書で、中国の章疏は妙楽大師湛然の『止観輔行伝弘決』の一書である。また、『法華経』の品ごとにとみると、「方便品第二」「見宝塔品第十一」「提婆達多品第十二」「勸持品第十三」「常不軽菩薩品第二十」「如来神力品第二十一」がそれぞれ一箇所、「薬王菩薩本事品第二十三」が三箇所である。『涅槃経』は「梵行品」の一箇所である。それらの引用は、「法華経は良薬」「法華経は真実の經典」「末法は女人が病にかかる時」「法華経や天台大師による寿命長遠の先例」「法華経への信仰・志」「女性の成仏・受記」の典拠であることが理解できる。

ではつぎに、薬王品の「後五百歳中 若有女人」について、他の聖人遺文から抽出し、文意を確認したい。

三 日蓮聖人遺文にみる「後五百歳中 若有女人」について

「後五百歳中 若有女人」について、聖人の他の遺文から抽出すると、二遺文二箇所確認できる。それは次のようである。

(1) 女人ノ往生成仏ノ段ハ。經文ニ云ク若如来ノ滅後後ノ五百歳ノ中ニ若有ニ女人一聞ニ是經典ヲ如レクク修行セハ於レテ此ニ命終シテ即往ニ安樂世界阿弥陀仏ノ大菩薩衆ニ囲遶セル住処ニ生ニ蓮華ノ中宝座之上ニ等云云。問テ曰ク此經此品ニ殊ニ女人ノ往生ヲ説ク有ニ何ノ故カ乎。答テ曰ク仏意難レ測リ此義難レ決シ歟。(中略) さるにては女人ノ御身ヲ受させ給ては、設きさきさんこうの位にそなはりてもなにかはすべき。善根仏事をなしても、よしなしとこそをばへ候へ。而此の法華経の薬王品に女人往生ヲゆるされ候ぬる事又不思議ニ候。

(2) 第八の譬への下に一の最大事の文あり。所謂此經文ニ云ク有ニ能受ニ持スルコト是ノ經典ヲ者モ亦復如レ是ノ。於テ一切衆生ノ中ニ亦為第一ナリ等云云。此二十二字は一經第一の肝心なり。一切衆生の目也。(中略) この経文を昼夜に案じ朝夕によみ候へば、常の法華経の行者にては候はぬにはんべり。是經典者として者の文字はひととよみ候へば、此世の中の比丘・比丘尼・うば塞・うばいの中に、法華経ヲ信シまいらせ候人々かとみまいらせ候へばさにては候はず。次キ下の経文に、此の者ノ文字を仏かさねてとかせ給ッて候には、若有女人ととかれて候。(中略) 一切の人はにくまばにくめ。釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏乃至梵王・帝釈・日月等にだにも、ふびんともわれまいらせなば、なにくるし。法華経にだ

にもほめられたてまつりなば、なにかたつましかるべき。⁽⁴⁾

(1)の文は、文永二(一二六五)年に系けられる『薬王品得意抄』の一節である。この『薬王品得意抄』は、薬王品に、法華経が他経よりも勝れることを十種挙げる「十喻」についてと、また、女人が往生することについての「女人往生」が説かれるが、そのことを聖人は解説されている。この(1)の一節は、「女人往生」について聖人が問答形式により解説される箇所である。すなわちこの法華経、なかでも薬王品に女人の往生を説くのは、どのような理由からか、という問いに対し、⁽⁵⁾み仏のみ心は深く測りがたく、簡単には決定できないとしつつ、仏教でも仏教以外の經典でも女人の成仏を禁じてきたことが示される。その例として外典の「三従」、仏教の「五障」を挙げられる。そして、仏は不妄語の人なので嘘はなく、女性が成仏することはないはずであるのに、法華経の薬王品に女人往生を許されたことは、不思議なことである、と答えられる。

このように、他の外典や法華経以外の仏典において、女人の往生は記されず、法華経の薬王品において説かれることを「不思議」であると聖人は指摘されていることがわかる。

(2)の書簡は、文永十二(一二七五)年に系けられる『四條金吾殿女房御返事』の一節である。この書は、三十三の厄年に

あたる四条金吾の妻に宛てられた書簡である。

この(2)の一節の前文に聖人は、法華経の薬王品に説かれる十喻は一切経と法華経との優劣を説くが、釈尊の本意は一切経の行者と法華経の行者とでは、法華経の行者のほうが偉大であると示されているとして、第八番目の譬えである、「有能受^ニ持^ス是^ノ經典^ヲ者^モ亦復如^レ是^ノ。於^テ一切衆生^ノ中^ニ亦為^レ第一^{ナリ}」の文を挙げられる。また、この「是經典者」の「者」という字は「ひと」と読み、この経文のあとには、「若し女人あつて」と記されることから、この「ひと」とは「女性」のことである、と聖人は指摘される。そして聖人は法華経以外の經典や外典などに一切の人から女性が誇られていることに対し、法華経はそうではないとして、釈尊・多宝仏・十方の諸仏、ないし梵天・帝釈天・日月天などから憐れみのまなざしで目を向けてもらえるほうが、あるいは法華経にだけでもほめてもらえるならば、肩身の狭いことはない、と四條氏の妻を励まされるのである。

このように、法華経の薬王品には法華経を信仰する女性は釈尊・法華経から憐れみのまなざしで目を向けられている、と聖人は指摘されていることが知られる。

以上、「後五百歳中 若有女人」について、他の聖人遺文から抽出し、文意を確認した。このことから聖人は、法華経の薬王品に女性の往生を説くことから「不思議」とされている

日蓮聖人における富木尼教化の一考察（奥野）

こと。また、他の經典で嫌われた女性が法華經では積尊・法華經などから憐れみのまなざしで目を向けられていることの根拠として用いられていることが理解できるのである。

四 おわりに

以上、日蓮聖人は富木尼の病苦に対し、いかに教導されたのかという関心のもと少しく考察した。そのことにより、聖人の富木尼の病に対する教導について、引用經論釈の典故を確認することで、聖人は法華經の文証によって教示されていることがわかる。そして、女性である富木尼に対し、法華經薬王品の中の經文を根拠として法華信仰を勧奨されていることが知られる。

このように論を進めると、聖人は富木尼の直面する「病苦」に対し、『法華經』・教主積尊を至上とする立場のもと教化活動を展開されていることが、あらためて理解できるのである。

1 『可延定業御書』（『定遺』身延山久遠寺、平成十二年、八六一～八六二頁）。

2 鈴木一成『日蓮聖人御遺文講義』（第十二卷、一九五頁）、高田惠忍『日蓮聖人遺文全集講義』（第二十二卷、二九一頁）、岡元鍊城編『真蹟対照現代語訳 日蓮聖人の御手紙』（第一卷、一二四頁）、『日蓮聖人遺文辞典——歴史篇』（身延山久遠寺、八八四頁）などを参照。

3 『薬王品得意抄』（『定遺』三四一～三四二頁）。

4 『四条金吾殿女房御返事』（『定遺』八五六～八五七頁）。

5 ここで、「安樂世界 阿弥陀仏」と説かれることについてであるが、聖人は『守護国家論』において、「爾前ノ浄土ハ久遠実成、釈迦如来ノ所現ノ浄土ニシテ実ニハ皆穢土也。法華經ハ亦方便・寿量ノ二品也。至ニテ寿量品ニ定ニル実ノ浄土ニ時此土ハ即定メ浄土ナリ了ヌ。但シ至ニテハ兜率・安養・十方ノ難ニ者不レシテ改メ爾前ノ名目ニ於ニ此土ニ付ニ兜率・安養等ノ名ヲ。例セハ如下シ此經ニ雖レモ有ニ三乗ノ名一不レカ有ニ三乗一。不須更指觀經等也ノ積ノ意是也。法華經ニ無ニ結縁一衆生ノ当世願フハ西方浄土ニ樂ニト瓦礫ノ土ニ是也。不レ信ニ法華經一衆生ハ誠ニ無ニ分添ノ浄土ニ者也」（『定遺』一二九～一三〇頁）と説示がみられる。

6 『妙法蓮華經』（『大正』第九卷五四頁b）。

〈参考文献〉

- 鈴木一成『日蓮聖人御遺文講義』（第十二卷、日本仏書刊行会、昭和三十三年初版・昭和五十年再版）
高田惠忍『日蓮聖人遺文全集講義』（第二十二卷、ピタカ、昭和十二年初版・昭和五十三年復刻版）
岡元鍊城編『真蹟対照現代語訳 日蓮聖人の御手紙』（第一卷、東方出版、平成二年）
立正大学日蓮教学研究部編『日蓮聖人遺文辞典——歴史篇』（身延山久遠寺）

〈キーワード〉 日蓮、教化、病、富木尼、女性

（立正大学非常勤講師）